第1編 坂田の歴史

第1章 坂田の埋蔵文化財

ナウマン象が棲んだ坂田

坂田の自然がいまに近い形に作りあげられたのは、地質学上の時代区分でいうところの上古洪積世の後半、すなわち一〇万年ほど前のことだといわれている。

坂田丘陵の中腹の各所では幅広く貝類の化石が発見されている。現在の明石醤油の裏山、あるいは木廼加輪にある君津総合高等職業訓練校の周辺からは多数の大型貝類の化石が現われ、人々を驚かせた。これは海成層といわれて、〝海底時代〟のなごりなのであった。

人類に歴史があるように、地球にも歴史がある。それを地史といい、その時代を地質時代という。地質のスタートが何年前であったか知るよしもない。六五億年前だという学者もいれば、五〇億年前という人もいる。いずれにしても、地質学上でいう古世代であり、その時代は日本全体が海の底にあった。

地質学者たちの定説によれば、房総半島の丘陵地帯の高層部が徐々に海中からその頂部を出しはじめたのは新世代の新第三紀の中ごろ（一五〇〇万年以前）から鮮新生（一〇〇〇万年以前）にかけてのことだった。そして、第三紀の洪積世の初期（一〇〇〇万年～五〇〇万年以前）に、土地の隆起とともに、現在みられるような小段丘や台地が露出してきたのだった。

当時は火山活動が激烈をきわめ、陸上の火山も、海中にある火山も、狂ったように火山灰を噴出し、付近の海底に堆積した。三浦層という非常に厚い凝灰岩を形成した。そして関東地方では新世代第三期も終末のころ、海は一斉に後退し、一方、著しい地殻運動が起こった。隆起時代である。すなわち第四紀洪積世の時代に入ったのだ。房総でもそれまで海底であった地塊が続々と隆起した。このとき房総は三浦半島と地続きの「三浦房総半島」を形作ったが、ほぼ同時にその北側には一大陥没地が生まれ、そこに九十九里方面から海水が浸入して一つの湾を作った。「古東京湾」といわれるものがそれである。現在の関東平野は周辺の山麓地帯を除いて大半がこの「古東京湾」の底となった。房総南部と銚子付近だけが陸地として残り、銚子は「古東京湾」の出口にある孤立した島だったといわれている。

その時代には日本はある部分で大陸と陸続きとなっていた。大陸から渡来した巨象の類が自然のままの森林や陸地を歩き回り、咆吼していた。房総地方でも富津、君津、木更津、東金、佐倉などでナウマン象の化石が発見されており、この地帯一帯はそれら巨象の棲み家となっていたのだろう。

ナウマン像の化石は、ここ坂田でも発見された。昭和四十九年十一月で、発見者は木

坂田字鵜口のナウマン象化石発見地

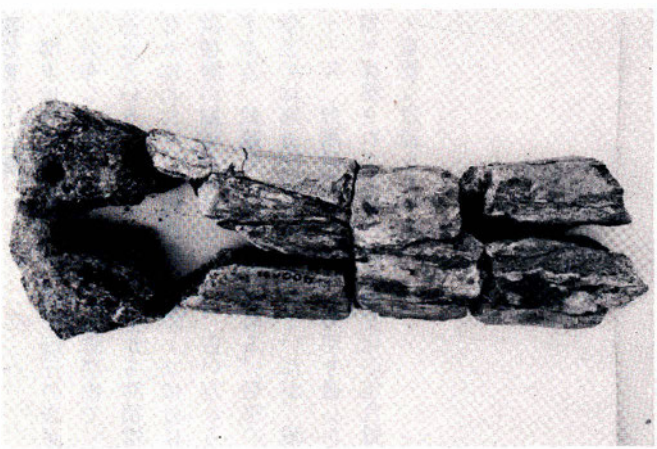
更津市清見台に住む考古学研究家の伊藤聖一氏であった。伊藤氏は当時、遺跡、文化財などの調査のため坂田丘陵一帯を幾度となく歩き回っていた。そんなある日、大関谷と呼ばれている下堰の北側、つまり字鵯口（ぼらぐち）の道路に面した南斜面の崩された砂礫層の中に長さ約八〇センチもの巨大な化石を発見した。そして、それを詳細に調べたところ、ナウマン象の大腿骨の化石であることが判明した。

その翌日、付近をくまなく調査し、新関谷（上堰）の西端、字関山に属する山頂を崩しならした平坦な砂礫層の中から、やはりナウマン象のものと思われる臼歯化石を発見したのであった。

数十万年前から十万年前ごろ、坂田をはじめ房総一帯は、これら巨象たちをはじめ、大陸から渡ってきた虎や豹、あるいは大角鹿などがかっ歩していたのである。これらの動物たち、すなわち人類にとっての食糧を追って、人類も大陸から日本列島にやってきたものと推定される。

縄文人の住んだ坂田——縄文遺跡と土器

洪積世最後の氷期にむかうにつれて関東地方には大平野が形成された。一〇万年前から一万年ぐらい前のことである。その間、現在の関東平野深く入り込んでいた古い東京湾の海底堆積物が砂・粘土となって陸地化し（成田層という）、その上層を関東ローム層という火山灰がおよそ六メートル前後の厚さでおおった。そしてこの赤土というローム層のなかからわが国における最初の人類生活のいとなみを伝える遺物が発見されたので



坂田から出土したナウマン象大腿骨化石（伊藤聖一氏所蔵）

あった。それが貝塚遺跡である。

関東台地が出現したころ、その周辺にひろがる遠浅で波静かな入江の海は貝と魚の宝庫となった。なかでも東京湾はその最大の宝庫であったにちがいない。貝塚文化のもっとも盛んであった地域は、現在の東京湾沿いの台地一帯であり、これについで利根川沿いの低地をひかえた台地、それから太平洋岸という順序になっており、人々は漁撈と貝類の採取で生活していたと思われる。ときには狩猟や木の実の採取にも出かけたであろうが、主たる食糧は海の幸に依存していたといっていい。

今から約一万年ぐらい前には人類の生活はほぼ確立した。人々は硬質の石をよく磨き、刃先のように鋭く削り、それを生活の道具として使用し始めた。それは磨製石器というもので、新石器時代ともいわれている。

その後、人々は土器というものを作り出した。土器には縄の網目の模様をつけ、考古学者たちは後年、この時代を縄文時代と名付けた。縄文時代はそれから紀元前三〇〇年、すなわち今から二三〇〇年ぐらい前まで続いた。

貝殻や魚の骨、あるいは使用不能となった石器や土器は一カ所に捨てられた。それが貝塚となり、この貝塚遺跡の発見によって、当時の人々の生活が類推されることになった。

貝塚は千葉市加曽利町、市川市北国分寺町、山武郡横芝町など千葉県下の海岸近くのいたるところで発見され、その数は二六二カ所にのぼっている。

貝塚の多くはいろいろな型式の縄文土器を出土するので、それぞれの時期の型式の数になおして集計すると、千葉県下では総数七〇〇を越える貝塚がつくられていたという。

■関東ローム層

関東地方の丘陵や台地、河岸段丘の表面に広く分布し、火山活動に由来する堆積物で、俗に赤土という。堆積年代は洪積世から沖積世のはじめにわたり、第四期層のグループに分けられ洪積層の編年が可能となった。古い方から多摩、下末吉、武蔵野、立川と呼ばれる。従来の考古学上では無遺物層とみなされていたが、昭和二十一年、群馬県岩宿でロームの切り通しから石器が採集されて以来、無土器文化の包含層として重要な意義をもった。

とくに縄文後期にはいって、遺跡の数が飛躍的に増加し、貝塚文化の繁栄が頂点に達したことがわかるが、それも長くは続かなかった。縄文晩期、貝塚は急速に減少している。

東京湾沿いに広い遠浅の海岸をもっているわが郷土・坂田もまた貝塚文化の繁栄した土地の一つであった。

君津市教育委員会社会教育課でまとめた君津市埋蔵文化財包蔵地一覧表によれば、この周辺には多くの遺跡、出土器、古墳などが発掘調査されている。たとえば、小糸川下流地域では、小糸川北辺の縄文期、弥生期に属するものとして、坂田吉ケ作、本名輪、久保納戸山、北子安中打越、南子安埜田、さらに三直の沖入、天王台などの丘陵や台地があげられている。さらに小糸川南辺には上湯江上野台、新御堂元秋葉台、下荘台、三船台、小山野の高塚、および六手根岸の鹿島台などの丘陵地帯からも多くの土器が発見されたのであった。そこから判断しても坂田の丘陵地帯には、古く縄文、弥生時代に人類が生活していたことが立証されるのである。

前出の考古学研究家の伊藤聖一氏はナウマン象大腿骨化石の発見にはじまって、坂田の古代の遺跡を次々と発見し、われわれ郷土の歴史を学ぶ者にとっては数少ない恩人である。

昭和四十四年五月のことだ。そのころ新日本製鉄は当神免の海抜五〇メートルの山頂に送電線用鉄塔の建設工事を行なった。伊藤氏がこの工事現場を探訪すると、縄文土器があたかも彼を待ち受けていたように出土したのであった。

田戸下層式土器（約八〇〇〇年前）の破片一〇個、夏島式土器（約九四〇〇年前）の破片一六個のほか数々の土器を発見した。いずれも縄文早期のもので、これによって坂

郷土の考古学研究家・伊藤聖一氏

田丘陵の一角にはすでに一万年も以前から人類が生活していたという事実をつきとめることができたのであった。

伊藤氏はそのときの感動を『君津町誌』に記述している。

「野山も新緑につつまれた五月の初め、君津町坂田の開発造成地へ土器片の採集に出かけた。偶然にも小字当神免という丘陵の背にある、遺跡にぶつかった。

遺跡は数丁下にある海から、そそり立っている海抜五〇メートルほどの小高い丘陵の頂にあり、山頂は、広くはないが平である。その平坦な部分にはローム層が厚く堆積し、まわりの山とは、ロームの堆積が異っている。付近の山はローム層の堆積がほとんど見られず、あってもそれはきわめて薄く、すぐに海成層である。或は海から吹き上げられる強い風によって、低い所や丘裾に吹き寄せられてしまっているのかも知れない。遺跡のあった山頂は、平らな部分の両側を残すようなかたちで、真中が無残に削り取られていた。そのため貴重な遺物のほとんどがブルドーザーの下敷きになったり、掘り起されたりして、まったくの壊滅状態であった。削りとられた東南の『ガケ』には、オレンジ色の灰が一五センチほど堆積していた。この灰は恐らく破壊された炉跡の一部かとも思われる。

その炉跡らしき物の灰の中から、弥生中期の土器片をみつけた。土器片は口縁部に幅の広い帯を巻きつけ、その帯に羽縄文をまいてあった。胴部は無文で土器は四ミリ程度の薄手で、焼成はあまり良い方ではなかった。この丘陵背の遺跡の南側と北側に、ブルドーザーでかき集められた土が山と積まれていた。

そのなかから三角鏃一個と、黒燿石で作った石匕一個、自然の河原石を利用した磨製石斧一個と、その外に多数の土器片を採取することができた。これ等の土器を通い慣れた千葉大の大場先生の教室にもっていった。大場先生はその土器を、縄文前期・中期・後期・弥生中

期と分類された。

大場先生は分類の最中早いまばたきをしながら『これは諸磯式土器だ』といった。私はふと、若かりしころの先生がX式土器と称して、この諸磯式土器を追い求めていた姿を思い出し、先生の白くなった頭髪をじッと見つめた。

前期の諸磯式土器は、竹の半管を器面におしつけて、二本の平行線を引き、その中に半管を突き刺して弧をつくり、それを連続させて組み合わせ、紋様を描いた半管文土器である。縄文前期の土器が、木更津附近において確認されたのは、おそらくこの時の採取が初めてであったであろう。縄文後期の土器は無文であり、弥生中期の土器は口縁部に細く帯を巻きつけ、全体で縄文がつけられたものなど三種類であった。また、弥生中期の土器片の底部に、なにか押しつけたような楕円の圧痕が残っていた。この圧痕を藤森栄一氏は、籾あとだろうといっておられるが、残念ながらこれは籾あとといえる程、ハッキリした圧痕ではなかった。

私たちは雨あがりになると、必ず坂田遺跡をたづねて、土器片を採取した。そんなことを繰り返し、もはや一年と数カ月が過ぎた。ある日、いつものように山と積まれた土をひっかきまわしていた。その時、土の中から少し頭を出した土器片が、目の中に飛びこんできた。取り上げて土を落してよく見ると、口縁部に小さな刻みをつけ、土器の内部に繊維をふくまず、厚さが六ミリほどのサルボウの口で紋様をえがいた、まさしく縄文早期の土器片であった。

その後、坂田遺跡からは多くの縄文早期の土器片を採取した。採取した土器片は、全体に斜縄文をつけ口縁部頭頂にも縄文をおしつけた井草式土器。より糸文や斜縄文で描かれ口縁部にふくらみをもつ夏島式土器。稲荷台系のより糸文土器。口縁部が直上し口縁部からすぐ撚糸文が施文された花輪台式土器。雲母を含み、貝殻文の描かれた焼成の良い三戸式土器。無紋の物と、ヘラがきによる沈線文とつきさし文を組合せた田戸下層式土器。沈線文の描かれ

縄文早期夏島式土器（約9400年前）

た極めて焼成のわるい鵜ヶ島式土器。サルボウなどの背で描いた条痕文が両面に施文されている茅山式土器などである。

採取した遺物は土器のほかに、石皿の破片二個、スリ石一個、石錘一個であった。石錘は切りくずされたガケの断面から採取され、その面は田戸下層式土器の作られた時代よりさらに古い時代に、すでに網による漁が行なわれていたことになる。

遺跡はきわめて海に近いため、漁撈や貝の採集が盛んに行なわれていたと思われるが、貝殻が全く見あたらないのは、どういう理由からなのであろうか。

掘り起された土をひっかきまわしながら、同行者の安田淳一氏はこのような縄文早期の遺跡は人が長く住んだものではなく、キャンプ跡ではないかといったが、おそらくそうであろう。この坂田道よりも少し先の人見の山が切れようとしている頂に、やはり縄文早期の人々が生活をいとなんだ跡が見出された。坂田遺跡の東のはしには、今も時折り新しいしめ縄が張られ、賽銭まであげられる根強い信仰がのこった、山の神が祭られている。この山の神こそ縄文弥生時代を通じて、長い長い間、泣いたり、笑ったり、また歌ったり、踊ったりした、大古の人々の生活の場を脈々と守り伝えて来た、今日の姿なのであろう。」

縄文土器が発見されたのは当神免の小丘ばかりではなかった。国道一六号線に接し木更津市畑沢の南側に位置する坂田吉ケ作でも多数発見されている。吉ケ作の山頂は東京湾を眼下に見おろせる景勝の地である。また坂田字原の平野竹治氏宅の裏山の山頂からもいくつかの縄文土器が出土した。

農耕技術の伝来と弥生遺跡

自然採取経済の縄文時代が終わると、弥生式土器に代表される弥生時代がやってきた。弥生時代は、西暦元年を境にして、前後三〇〇年のおよそ六〇〇年間を指す。

縄文式文化が採集経済に終始した石器文化であるのに対して、弥生式文化の特徴は農耕技術、金属器利用、紡績工芸を可能ならしめたことであった。弥生式文化は明らかに大陸から伝来したものであった。中国大陸から朝鮮半島を経て九州に上陸し、それが日本全土に広がるまでにはおよそ一〇〇年から一五〇年の歳月を費したといわれている。

弥生式文化の最大の特徴は農耕技術、すなわち稲作の伝来である。すでに縄文時代において、自然採取経済から農耕への萠芽が見られてはいたが、縄文時代には、生活の中心は漁撈と狩猟で、人々は獲物を求めて集団移動を繰り返してきた。稲作技術の伝来は、そうした縄文時代人の生活に一大変革をもたらし、弥生文化という新しい文化を生み出したのである。

農耕が生活の中心になったことによって、人々は潤いのある土地に定住することになった。静岡県の登呂遺跡、千葉県木更津市の菅生遺跡などにみられるように、人々は竪穴式住居や高床式倉庫、水田を作り定住した。遺跡からは土器、石器、骨角器、さらに木製の杓子、椀、クワ、スキ、たてぎね、田舟、田下駄などが出土した。

君津の隣り、木更津市の菅生遺跡は弥生式遺跡として著名である。小櫃川改修工事のため滅失してしまったのは残念ではあるが、坂田からそう遠くないところで弥生時代の遺跡が発掘されたことから、この地域でもほぼ同じような生活をしていた人がいたこと

が推測される。事実、君津市周辺においても、富津市西大和田の県立君津商業高等学校の校庭拡張工事に際して、弥生式遺跡が発掘されている。当時、調査に参加した県立木更津高校の中嶋清一氏によれば「久我原式土器のコシキ、カメ、ツボ、バン、タカツキなどが発掘され、竪穴式住居の一部も確認された」(『君津町誌』) と報告している。これら出土品は同校に保存され、貴重な資料となっている。

このほか、坂田近辺では、弥生式遺跡として南子安住居址や三直台谷住居址が発見されており、坂田吉ケ作あたりでも弥生式遺跡と思われるものが発見されている。

ともかく、この弥生時代の到来は人々が初めて人間らしい生活を営むことができたといってよい。当時の日本全体の人口は約三〇〇万人ぐらいといわれている。この坂田に住んだ祖先たちは小糸川に近いという地理的好条件を生かしながら稲作に従事していたのであろう。

この時代の稲作は苗代などは作らなかった。水田に直播きであったと思われる。おそらく病虫害といった問題もあったろうが、しかしそれでも秋ともなるとほどほどには実ったとみてよい。人々は石庖丁で稲の穂先きを摘み、田舟で運び出す。湿田では大きな田下駄をはいて作業したらしい。そして木臼とたてぎねでつき、蒸して食べた。家族は普通五～六人といわれているが、はたしてそこに団らんのような光景があったのかどうか、興味はつきない。

当然、人々は病気にもかかったはずだ。薬草などがせめてもの治療法であったのだろうが、原始信仰である太陽神や山岳神にも祈願した。一つの集落の人数は六、七〇人ぐらいと見られ、その指導者をムラオサと呼んだ。祭りや祈願にはムラオサの指導力が大

いに発揮されたものと思われる。

このムラオサの権力が次第に強くなって、やがてそこには身分というものが生まれた。人間には生まれながらの能力の差があるけれども、この時代は腕力や智力がそのまま身分の差、貧富の差を生んでいた。

ムラの誕生と小国家の成立

稲作が始まった日本においては、土地の良否、道具、労働力、智力などの差が収穫に響き、そのまま収穫の多い集落がさらに水田を拡張した。そしてそれを繰り返しているうちに、ムラの力にも相当な差が生じ、強いムラは弱いムラを支配下におくようになった。ムラのいくつかはクニとなり統率された。クニの中でもまた力の差が生まれ、各地には小国家が形成されていった。

小国家は中国大陸に使者を送り、皇帝に貢物を差し出し、自分の国の安全を図るとともに、中国の高い文化を吸収しようとした。

弥生時代の後期、中国では後漢の時代であった。その『後漢書』という歴史書には「東夷傳」という一項があり、それには日本について非常に重要なことが書かれている。簡略すればこういうことだ。

建武中元二年（西暦五七年）、倭の奴国が貢物を持って挨拶に来た。使者は自分のことを太夫と名のっている。奴国は倭の南の端にある。後漢の第一代の皇帝である光武帝は飾り紐をつけた印を奴国に与えた。

第六代の皇帝である安帝の永初一年（西歴一〇七年）に倭国王の帥升などは生口（奴隷）一六〇人を差し出し、皇帝にお会いしたいと申し出た。その後（二世紀の後半）、倭国に戦乱が続き、人びとは殺しあい、長い間、国王はいなかった。

これからわかることは、日本ではすでに小国家が誕生し、国王などと称する人によって統治されていたことである。そしてクニとクニとの間には、良地を求めて激しい争いが起こり、戦乱の世が続いたものと思われる。そして長い歳月をかけて一つの大きな国家へと動き出しつつあったのであろう。

中国の後漢の次が三国時代である。魏、呉、蜀の三国に分かれ相争っていたが、その魏の国の歴史書、『魏志倭人伝』では、三世紀の日本には耶馬台国という国があって、約三〇のクニ（小国家）を従えていたとある。

この耶馬台国の女王がすなわち卑弥呼であった。西紀二三九年に魏の皇帝より「親魏倭王」という名と金印、銅鏡を賜ったとある。

周知のように、耶馬台国がどこにあったかについては諸説に分かれている。大和（近畿）なのか北九州なのか、結論は今後の研究にまつ以外にない。

なお『魏志倭人伝』には倭人の社会や風俗についての記述もある。

それによると男子は大人も子供もみな入墨をしていたという。入墨といえば南方の風俗ということもあり、日本の一部に南方から渡来した人々があったと考えられる。作物には、稲、麻、桑などがあり、麻布や絹を織っていたという。

われわれの住む上総、下総は昔からフサの国といった。フサとは麻のことであり、この地方は麻の産地だった。はたして弥生時代の末期、どれほどの麻を生産していたのか

■卑弥呼

『魏志倭人伝』によれば、卑弥呼は鬼道に仕え、よく衆を惑わすとあり、巫女的性格をもつ女酋長と考えられている。夫はなく弟が政治を補佐した。婢一〇〇〇人にかしずかれ、大規模な宮室に住み、二三九年に魏の明帝に難升米らをつかわして朝献し、「親魏倭王」の称号を受けた。死んだ際には径一〇〇余歩の墓に葬られ、奴婢一〇〇余人が殉葬したといわれている。

はわからないが、おそらくこのころ麻の栽培が始まり、次第に広がっていったものと思われる。

古墳時代の坂田の豪族たち

三世紀の終り、日本は近畿地方と北九州をそれぞれ中心にして、徐々に統一されつつあった。そして四世紀前半（古墳時代の初期）には近畿地方に勢力を張っていた大和朝廷が北九州勢を制圧し統一した。大和朝廷の始まりである。統一といっても、南九州の熊襲と関東から北の蝦夷は依然反抗していたので、大和朝廷の勢力圏はこの二つを除いた豪族を支配していたのである。

豪族の勢力のあるものを氏、その下を部といい、氏の所有する土地を耕作し、収穫の一部を氏に納めた。朝廷は氏に対して臣、連、君、直などの姓を与えて名のらせた。臣と連の豪族のうち、もっとも有力な中央豪族の頭はとくに選ばれて大臣、大連となり、大王（後に天皇）を助けて国の政治を司った。地方においては君、直を名のる氏の頭が国造や県主となって、地方行政を担当した。

大和朝廷は大和国（奈良県）の盆地を拠点として拡大していった。やがてそこも狭くなり、より広い河内平野へ進出した。四世紀の後半のころであった。

この三世紀後半から四世紀にかけて、大和地方を中心に古墳が発生し、それは近畿地方から瀬戸内海沿岸にひろがっていき、やがて全国的なものとなった。古墳とは豪族の墓である。一段と土を盛りあげて造られたが、それは豪族の力の誇示であり、造った者

■須恵国造

『国造本紀』によれば、成務天皇の世に総国に阿波国造、須恵国造、馬来田国造、伊甚国造、上海上国造、菊麻国造、武社国造が設置され、君津周辺は須恵と称され、大布日意弥命が国造に任命されたとある。小糸川流域を支配、のちに周准郡となった地方である。大布日意弥命はまた、湊川流域の天羽郡（現在の富津市）も支配下においたらしい。富津市飯野の内裏塚、九条塚を中心とする古墳群は国造一族の墓といわれる。

は、自分がその跡目であることを示す象徴としたのだ。前方後円墳、円墳、方墳、上円下方墳など形も多様で、豪族たちによる古墳作りが盛んだったのは、四世紀から六世紀で、「古墳時代」という時期はほぼ三〇〇年も続いたのであった。

この君津地方にも相当な豪族が居住していたらしい。大和田花里山古墳、久保納戸山古墳などが知られているが、坂田の古墳としては権現塚、東仲田の古墳がいずれも発掘調査されている。

権現塚古墳は坂田字谷七三二番地にあった。この地に住んでいた者は水越姓を名のり、また近くにも同姓の家があった。おそらくこの両家は同族同家であったにちがいない。権現塚のある水越家は屋号を権王と称し、その祖先は戦国時代に丸田城（大和田山）の守備にあたった部将であったと伝えられている。その西裏には海岸を見おろす見晴しのよい平坦地があり、幅広い勾配の地所があった。この地を権王山といったのである。

この塚は昭和十年、郷土史研究家の小熊吉蔵氏、小川政吉氏と地元の水越清氏らの協力で発掘された。

塚の形状は丸塚だが、やや楕円形。直径約三メートルで、蓋石には砂質凝灰角蠻岩の上質のもの三枚を使用し、比較的扁平な大きな石で羨道、玄室を覆っていた。そしてその壁にはつぶ石一〇個と岩石などが粘土性の強い土をもって塗りこめてあった。玄室の上には大きな楠の木が生えていたのでその下の一部は調査不能となった。発掘された出土品は次のとおりであった。

直　刀　三振（非常に錆び折れていた）

石　器　一個（用途名称は不明）

耳輪　三個
管玉　一個（瑠璃色）
硝子玉　一個（小さいもの）
その他　三個（用途名称は不明）

いずれにしても奈良朝時代のころの古墳と推定されている。

もう一つ発掘調査されたのは東仲田古墳である。

東仲田古墳は坂田字東仲田二一四番地にあったが、昭和四十八年八月、君津市教育委員会の手で調査された。その概略が報告されているので、それを引用したい。

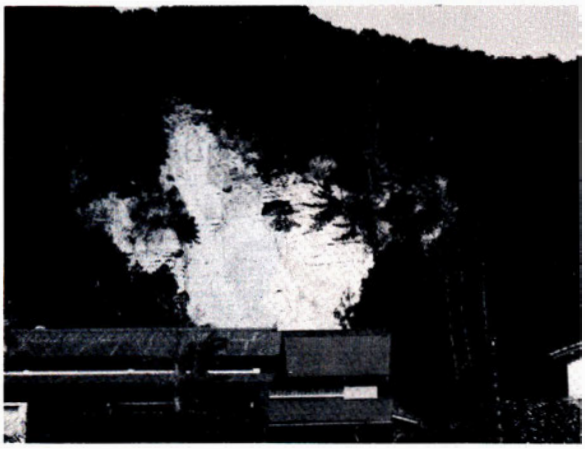
「この君津丘陵は、先土器時代から古代にかけての生活の場、文化が栄えた場であった。この丘陵上には貝塚、縄文遺跡、古墳時代の古墳、集落址が所在しこの東仲田古墳所在地の東南部近くの字明王塚の古墳は、中途盗掘されたことと開発の波に洗われて破壊され調査不能だが、大円墳であったといわれている。

この東仲田古墳は高さ約二メートルの台地に直径七メートル、高さ一メートルの土盛りをした小規模の墳丘を構築したものと認められ、粘土質砂岩で作られた長さ二・一メートル余の組石式石棺が東西に存在し、蓋石には六枚の板石を用いている。

蓋石の状態からかつて盗掘されたと認められ、複数の者を埋葬したものと推定されている。内容物はヤリガンナと認められる鉄器片一片のみであり、資料不足で年代的な判断は困難とされた。」

なお、この坂田には古墳と思われるものが他に三カ所ある。

坂田字仲町の斉藤保家裏山山頂。これは直径九メートルの円墳一基があり、この規模



斉藤保家裏山の横穴古墳

からみて相当に位の高かった者の墓と推定される。さらにその山頂の南側中腹から西方にかけては、いわゆる仲町の横穴古墳群（家族墓と認められる）と称するものが現存する。ここからは昭和初期に須恵器（壺）一個が完全な形で発見された（口絵写真参照）。

そこから約一五〇メートル西方の坂井伊之松家裏山にも横穴古墳があり、ほぼ同型の須恵器（壺）一個が発見されている。

また、坂田字原の平野竹治家裏山の南裾からもやはり同型の須恵器（壺）一個が発見されている（口絵写真参照）。

そして昭和五十五年春には坂田字仲町の栗原治次家の裏手では山崩れ防止工事の際、人骨二片が発見され、坂田の人々を驚かせた。これも、その中腹にある横穴古墳が山崩れで破壊され、山裾に落下して埋没していたのではないかとみられている。

この古墳時代、坂田にどのような人々が居住し、どのような生活を営んでいたのか、明らかではない。しかし、これらの古墳群からみて、かなりの人物が居住し、相当の社会生活が営まれていたことは明らかであり、今後の研究に待ちたい。

坂井伊之松家裏山から出土した須恵器